

がつて會員となつたのです。其の時の感興は亦別段でありました。

願ふに私と同様な境遇にゐて、此の道會の存在も知らない方も多々あらうとおもひまして、茲に私が此の會の會員となつた経路を告白して同好の方々に此の福音をお知らせするのです。

世界の戦亂に伴ひ、外來思想の進歩は彼の露獨の壊滅を見ても恐ろしいのであるから、我が國民は常

に自己の修養につとめ、人格の高上をはかつて以て、如何に過激思想や危険な社會主義などが浸入して來ても、之れに感染せぬやうにはからねばならぬのです。それには幸ひに道會の主張してゐる精神、修徳、愛隣、永生の四綱領を信奉して、一個人若しくは團體として挺身努力せられて國家の隆昌をはかられたいものです。

亞富汗を中心とする中央亞細亞の聯盟

大川 周明

中央亞細亞諸國の聯盟は、決して新しき問題でな

い。その起原は、之を汎回教運動が、汎ツラン運動

と提携せる時に、求めることが出来る。此等の兩運動は、共に宗教的並に民族的性質のものであつたが、兩者相結んで中央亞細亞諸國の聯盟を理想とするに及んで、著しき政治的色彩を帯ぶるに至つた。

既に一八六三年、亞富汗斯坦に於てドスト・ムハムマ

ツド汗の治世時代、汎回教主義の最も熱烈なる鼓吹

て、遂に種々なる方法を以て之を阻止した。

者として名高きザイド・ジャマルツンは、回教諸國

に向つて極力同盟を勸請し、是くの如き政治的利害

の共通が、回教其もの、興隆に、欠く可からざる條

件なることを力説して居る。

此事ありて幾何もなく、所謂汎ツラン主義が唱道せられ初めた。そは亞細亞に於けるツラニアン人全體の糾合を目的とせるので、同時に宗教的、文

化的、政治的の運動である。その唱道の當初に於ては主として文化的方面を高調し、土耳其語の復興、土耳其文學の建設を力説した。即ち回教の説教は土耳其語を以てすべきこと、一切の外來語——主としてアラビヤ語を、土耳其文學及び土耳其より驅逐し、

切の後援を惜まなかつた。彼れは波斯國民に向つて

は、世界に於ける唯だ二つの獨立回教國が、互に相反目するの非なるを告げ、宗派的感情を去りて提携すべきことを勧めた。

純乎として純なる土耳其を復活すべきことを熱心に主張した。而も是くの如き主張は、オーストドックスの回教信仰と抵觸せるが爲に、汎ツラン主義宣傳者は、汎回教主義と提携する目的を以て、次第に其の主張を改めて行つた。

此種の運動に激成せられて、一九〇二年メッカに於て世界回教會議の開催が提議せらるゝに至つた。

されど土耳其皇帝アブヅル・ハミッドは、斯くの如き會議が、アラビア人の勢力を増進すべきを恐れ

此等の運動は、素朴であり是非實際的であつたに

「道」第156号(1921.4)

拘らず、その間接の効果は極めて大なるものがある。蓋し中央亞細亞の諸邦は、此等の運動によりて初めて政治的、民族的自覺を覺醒され、世界政局に對して必要なる注意を拂ひ初め、明確に英露兩國より來る脅威を意識するに至つた。而して時を経るに従ひ中央諸民族聯盟の觀念が、次第に人心を動かし來りて、汎ツラン主義並に汎回教主義に對しても、以前とは異なる精神を以て之を迎へるに至つた。而して基督教國の止まるを知らぬ侵略に當る爲に、叙上兩主義の根底の上に、何等の形態に於て團結を試みんとする希望が、現實の問題として起つて來た。

三

此の希望の實現に對して現はれたる最初の具體案は、亞富汗王アブヅル・ラーマンによつて提唱せられたる亞富汗斯坦、波斯、プハラの三國同盟であつた。その主たる目的は、言ふ迄もなく露西亞の南下

一八七五年カウフマン將軍がシエヴァロフ伯爵の手を経て、當時の駐英露國公使に宛てたる書面は、回教徒に對する露西亞の政策を物語る。之に於て將軍は、歐羅巴の眞個の敵は回教其ものに外ならぬことを述べ、亞富汗斯坦及び中亞回教諸邦は、英露兩國の間に適宜分割せらるべきものなることを暗に提議して居る。

四

アブヅル・ラーマンは、其の努力せる三國同盟の成立を見ずして世を逝つた。彼れの後を嗣げるハビブラー汗は、即位と同時に父王の遺志を實現するに努めた。彼れは父王と同じく、中亞回教諸國が、貪婪なる北方の熊の餌食たることを免れる爲には、同盟協力して之に當る外に別途なきを知つて居た。

ボルシエ・ギキが露西亞を支配するに及んで、彼等は回教の救濟者たるべきことを聲明した。而して國

に備へるに在る。従つて該同盟は防禦的性質のものであり、加入三國は同盟に於て平等の地位を有し、一國が他を指導すると云ふが如きものでなかつた。アブヅル・ラーマンは、全力を擧げて此の三國同盟を成立せしめんとした。彼れは目の當りキヅの滅亡プハラの没落を見た。露西亞の波斯に對する横暴を見た、また其のハンジデーに於ける陰謀を目撃した。彼れは明白の自國の危険を意識せざるを得なかつたのである。

當時露西亞の政策は、其の南下の途上に横はる中央亞細亞の回教諸國を、徐々に且確實に亡ぼし行くに在つた。露西亞は三つの方法を以て此の目的を遂げんとした。第一は言ふ迄もなく武力を以てする直接の征服である。第二には若干の回教諸國を、同盟の名の下に誘惑することである。第三は回教諸國と英佛との間に紛糾の原因を蒔き、之に乗じて漁夫の利を占むることである。

内に於ける回教徒に獨立を與へた。さり乍ら彼等の與へたる自由は、條件附きの自由である。何となればボルシエ・ギキは、一面に於て回教諸國に自由を與へ乍ら、他面に於て之に強要する社會主義的組織を以てするからである。彼等はタンケントに本部を置き、中央亞細亞一帯に亘り、盛んに彼等の主義の宣傳に努めた。

併し乍ら中央諸國は、決してボルシエ・ギキの共産主義を喜ぶものでない。農業と遊牧とを主たる産業とする彼等にとりて、土地の私有を直ちに廢止せよと求むることは、到底彼等の肯諾を得る所以でなかつた。ハビブラー汗が赤露の宣傳を惡んだのは、之を領會するに難くない。彼れに取りて、ボルシエ・ギキの宣傳は、舊露西亞の武力と異なる所なき恐るべき侵略であつた。従つて彼れは露西亞が假令革命さ

も一層大規模に、中亞一帶に亘る同盟の成立を企てた。かくて陣中に於ける彼れの非命の最期は、彼れの政策を不便とするボルシエ并キの使嗾によるとさへ傳へられて居る。

五

常に亞富汗斯坦に於て見る繼承に關する血腥さ内亂の後、故王の後を襲へる現阿富汗王アマヌラー汗も、即位と同時に中亞聯盟の計畫に好意を表した。赤露政府の使者が、群をなしてカプールの宮廷に入込めるに拘らず、王は彼等の差出だせる手を握らなかつた。

亞富汗斯坦が赤露を斥けるのは無理もない。現にプハラの如き、名目だけは獨立を承認されたに拘らず、赤露は其中亞政策の實現の必要から、種々なる陰謀によつて此國を以前よりも窮地に陥れた。即ち昨年の夏、プハラの同志に計畫を授け、八月二十

個の獨立國に分立して居る——を糾合せんと政治的理想を抱いて居る。

六

中央亞細亞一帶は、百年以來亞細亞に於ける英露兩國の争因であつた。露西亞は彼得大帝の遺詔を遵奉し、驚く可き大膽と執拗とを以て南下政策を遂行して來たが、その最後の目的は印度進出に在つた。然るに英國は、カーゾン卿が明言せる如く、若し印度を失ふ時は一朝にして第三流國に墮すべきが故に死力を盡して露西亞の南下を阻止せねばならぬ。十九世紀の政治史は、實に此の一點を中心として描かれたるものと言ふも過言でない。

然るに露西亞帝國は亡んだ。その露骨なりし侵略政策も亦之と共に中斷した。英吉利は決して此の好機を逸しなかつた。それは西方の戦、最も酣なりし時に於て、然り勝敗の數未だ知るべからざりし危急の

九日の朝、革命的運動を起させた。而して暴動勃發と共に、迅速に赤軍騎兵をプハラに進めた。プハラ市間に於て慘憺たる戦ひがあつた後、市街は赤軍の手中に落ち、國王は殘餘の軍隊と共に南方に敗走した。此の憐むべき君主は、いま阿留汗斯坦の首府カプールに亡命して居る。

事情是くの如くなるが故に、中央亞細亞の回教諸國は、民族自決を與へられた當時こそ、赤露政府を喜んだが、今や皆な之を敵視するに至つた。本年一月下旬一群の視察團を東京に送れるバシキール共和國の如きも、赤露によつて獨立を承認せられたる南ウラルに位置する新回教國家である。予は親しく其代表者と數次會見して、彼等の意見を聴取したが、彼等も亦徹底してボルシエ并キに反對して居る。而して韃靼人なる彼等は、同人種の先覺たる日本の制度文物を範として國家を組織し、日本の後援の下に舊露西亞帝國內に於ける回教徒——今日に於ては六

時に於て、尙且中央亞細亞の經路に力を注ぐことを忘れなかつた。而して一時的成功を贏ち得た。

さり乍らボルシエ并キは、其實舊露に勝るとも劣らぬ英國の敵であつた。レニンは明白に英國を倒すことは、世界に於ける資本主義の根柢を覆へす所以だと聲言した。而して英國の最も急所とするところは印度であるが故に、赤露は舊露と別個の意味に於て南下して來た。意味は如何やうにもあれ、英吉利に取つては同一の危険である。否な、赤露の印度脅威は、舊露のそれよりも一層危険なる性質を帯びて居る。故に形勢は更に復舊して、中亞を挟んで英露の對抗となり、中亞諸邦は依然として北よりするボルシエ并キと、南よりする英國とによつて、社會的乃至政治的に蹂躪せられねばならぬ状態になつた。亞富汗斯坦を中心とする中亞回教諸國の聯盟は、世界混亂の此の機會に於て、出來得る限り彼等の將來に於ける發展の基礎を堅めんと計畫である。而

して世界戦前と等しく、中亞諸邦の政府は今日に於ても、概ね英國よりも赤露を恐れて居る。現に亞富汗斯坦の政治家には、英國の後援の下に自國を盟主とする中亞聯盟を計畫し、公然之を英國の公衆に訴へて居るものさへある。

さり乍ら露國崩壊後に英國が中亞に於て敢てせる火事場泥棒的活動は、中亞諸國の魂ある指導者をして、甚だしく憤激せしめた。而して土耳其に對する英國の態度は、世界の回教徒をして激しき敵意を抱かしめた。現に印度に於ては、多數の回教徒が、英國の治下に生くるを欲せずと公言し、續々國境を超えて亞富汗斯坦に移住しつゝある。故に英國を後援とする中亞聯盟は到底成立すべくも無い。加ふるに現亞富汗王は、英國に對して決して好感を有つて居らぬ。一九一九年、印度パンジャブに頻發せる暴動に對して、王は少なからぬ援助を與へて居た。されば英國側でも、亞富汗斯坦の勢力を加へるやうな聯

盟の成立を助けることを爲まい。要するに亞富汗を中心とする中亞聯盟の計畫は、回教徒覺醒の一證據として、吾等の興味を惹く事實であるが、その成立の時期は決して逆睹し難い。而も同回教徒に漲る反歐羅巴的精神は、次第に彼等を驅つて一致團結して共同の敵に向ふに至らしめねば止まぬであらう。

注 意

各方面の道や道話の讀者諸君から、金を拂つて居るのに雑誌が來ない云ふ御苦言が出る様であるが、之は當方の落度ではありませぬ。御存じの如く近年郵便物の幅轉、郵便局員の手不足から來る止むを得ない原因が然らしむるのであるから、諸君に於ても我慢して戴きたい。併郵便送の途中で紛失する場合は少なくないから、此の場合には再送致しますが、其の旨御一報下さい。次に集金郵便の事ですが、諸君が會費や代金の切れた頃更に前金を以て振替で雜誌代や會費を御拂込みになる、之を擦り違ひ位か又は御拂込みなつてから間も無く集金郵便が、此の代金を頂戴に行き事があり、之は當方から例に依つて集金郵便を差出します此集金郵便が郵便局の都合で、十五日も二十日も其のまゝ差出局に停滯して居つた爲めであつて之が爲めに諸君の御拂込になつた振替の金さ行き違ひになるのであります。決して當方から二重に御取立てした理でありませぬから此の場合には御遠慮なく御断り下さい。又、會費も雜誌代り會計上の都合から凡て前金で頂戴する事になつて居りますから充分御承知置き下さい。

時 評

(三月十六日稿)

足 堂

面白くなつて來た

泥棒と泥棒と喧嘩し、虎と狼と喧嘩し、暴を以て暴を討たしめ、毒を以て毒を制せしむる天の劑配、實に感服の外はない。其の周圍に集つて見物して面白さうに見たり、批評したり、論議して居る連中も、觀じ來れば皆同類で、貉、狸、狐、墓、蛇の様な化物ばかりで、予輩より之れを見れば皆醜族の一團である。道路の疑獄は怎か、瓦斯の疑獄は怎か、税關の疑獄は怎か、未だ疑獄と云ふまでにはなつて居らぬが、滿鐵事件は

怎なるだらふか、更に今朝始めて新聞紙上に表はれた、加藤總裁と廣岡幹事長との對決は怎なるだらふか、皆いづれも國民をして息氣を凝して見物せしむ大問題である。

斯く云ふと、人或は謂はん、何故にそれが面白いのか、其個人にとつては氣の毒であり、國家としては憂ふべきとではないか、其れを君の様な宗教家が面白いとは何事ぞ、君も亦誠意を有するものではないなと。否々決して左様ではない。今まで一生懸命になつて論議して來たが、誰も予輩の云ふとを聞かぬ。故に此上は只だ亡國の慘を見るばかりかと思ふて居たところへ、今度の様な事件が續々と起つて來たので、窃に天機を窺ふたところが、之はいよ／＼天が我

日本を救ひ給はんとする前兆である。恁いふ泥棒が上下に瀾漫して居ては、何の善事も出來ないから、先づ此泥棒を退治する爲めに、泥棒同士をして、互に斬り合ひ刺し合ひ、相方をして相方を絶滅して下さる思召である。顧みれば由來我國は、天佑に依て、屢々救はれて來た例がある。今度も亦た一種無類の天佑を以て、今や我日本を廓清して下さるのである。

只だ此際氣にかゝるのは、彼れ司直の上であるが、従前には此司直を掣肘し、檢束し、威嚇し、懷柔して、如此大事件を有耶無耶に葬らしめた實例が幾等もあるから、今度も亦、そんな事になりはすまいかと思ふが、今日は司直の中にも、モ一、大分硬骨の青年が殖えて居る、未だあまり世俗の濁流